

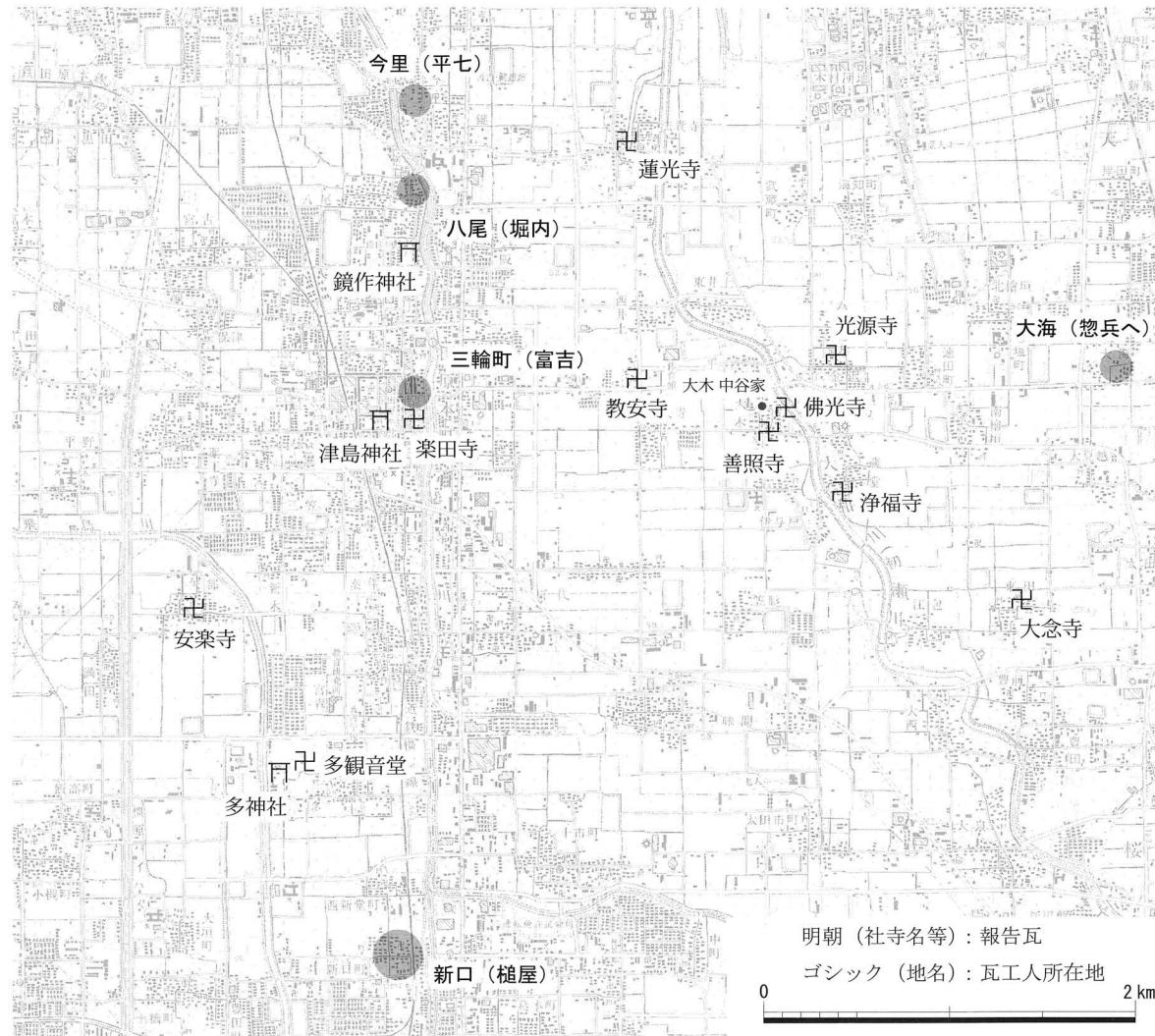
田原本の近世棟端飾瓦と瓦屋・瓦師

河森一浩・清水琢哉・藤田三郎

1. はじめに

これまで田原本町教育委員会では、多神社・津島神社・蓮光寺など町内の近世社寺の建替えに伴つて発掘調査をおこなってきた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。また、奈良県文化財保護指導員の中西秀和氏は、町内の社寺等に葺かれた棟端飾瓦について調査をおこなっている⁵⁾。

こうした成果を受け、唐古・鍵考古学ミュージアムでは、平成20年度春季企画展として「瓦に込めた願い－田原本の瓦作りと民間信仰－」展を開催し、年号や瓦屋・瓦師の銘をもつ棟端飾瓦を中心に展示をおこなった⁶⁾。以下では、社寺瓦の全容を示すものではないが、展示に際して集成した神社3ヶ所、寺院9ヶ所と個人所有の棟端飾瓦等の36点について報告する（第1図・第4表）。



第1図 位置図 (S = 1/40,000)

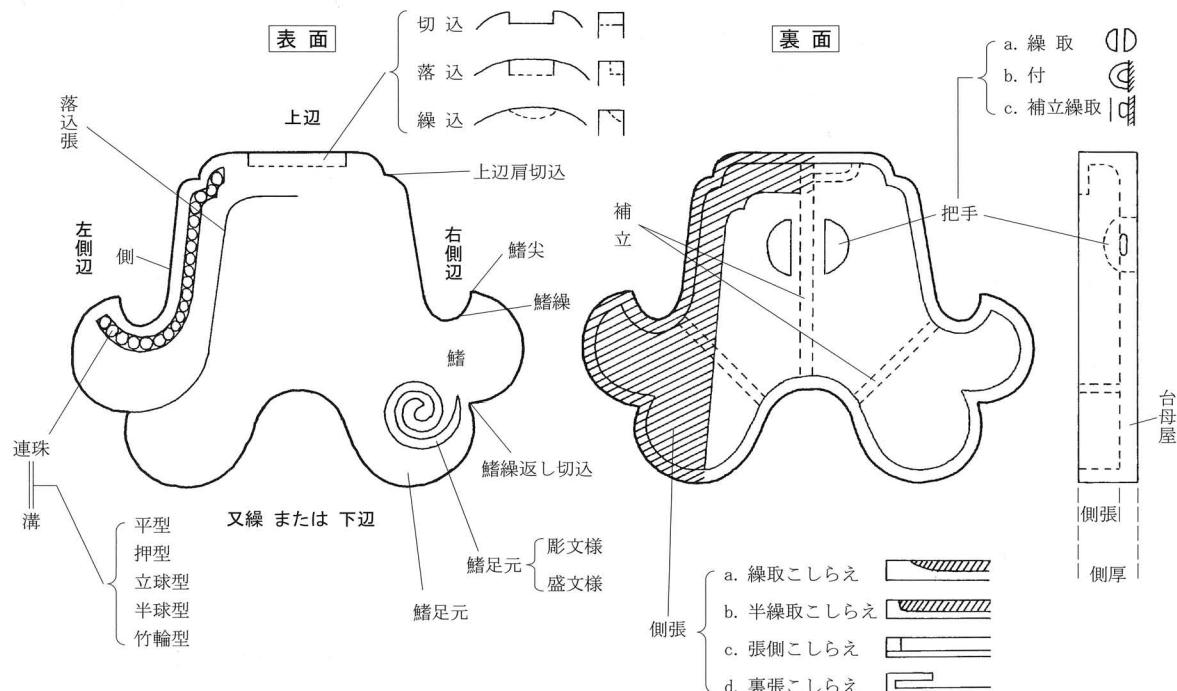
2. 棟端飾瓦の名称と部位名称

棟端飾瓦については、小林章男氏の一連の研究がある⁷⁾⁸⁾⁹⁾。小林氏は、文献史料や瓦の刻銘の表記を整理し、棟端飾瓦の1つとして鬼瓦を位置づけるとともにその出現時期を考察した。また、この棟端飾瓦については、表面の意匠から、1.鷲尾瓦（蚩尤神）、2.棟端飾瓦（蓮華紋）、3.吻様式飾瓦（招福神）、4.獅子口瓦（御所・神社・門跡寺院）、5.鬼面瓦（憤怒相）、6.祈願・呪文紋瓦（威嚇・願事・呪文）、7.鯱瓦（水と共に防火の神）、8.鳥衾瓦（飾瓦の最上を飾る）に大別した¹⁰⁾。なかでも鬼面瓦については、全国各地の中近世の鬼面瓦を集成するとともに、瓦製作者の視点からその見方や用語を解説し、形態や技法、変遷を明らかにした。

ここでは、これらの一連の研究成果をもとに田原本町内に点在する棟端飾瓦のうち、鬼面瓦と祈願・呪文紋瓦を観察し、その形態や製作技術、特徴について報告する。なお、部位名称については、小林氏の用語を使用する（第2図）。なお、棟端飾瓦は、その使用建物や屋根の位置により大棟・二の鬼・降棟鬼・稚児鬼があり、形態や法量が異なる。本報告資料では、葺かれていた建物や位置について判る範囲で記述することとするが、特定できない資料も多くあり、個々の資料の形態や特徴を中心に述べる。

本報告資料の棟端飾瓦としては、鬼面瓦と祈願・呪文紋瓦がある。はじめにそれらの特徴をまとめておく。このほか、隅蓋瓦や平瓦の銘文のあるものも報告する。

〔鬼面瓦〕 表面に鬼面の表現がみられるもので、土台部分の「母屋（母家）」は長方形あるいは台形の平面形を呈し、その母屋に立体的な鬼面を張り付けているものである。母屋下辺は直線的、あるいは逆U字形の又縁のある2形態である。また、両端に鰐がつくものとそうでないものや、さらにその下に鰐足元がつくものがある。



※小林章男 1991『続 鬼瓦』図8を一部改変

第2図 母屋部位名称



第3図 鬼面瓦の合子痕（左）と母屋中央の落込張（右）

表面の鬼面を貼り付ける部分については一段低くする「落込張」の手法をとるものがある（第3図右）。また、側辺部分には「連珠」を配するものがみられ、連珠は竹管の押捺や半球形の粘土を貼り付ける手法をとる。鬼面の成形には、合子（型）を用いるものがある（第3図左）。鬼面の上半と下半部は別作りで、その上半部に合子を用いる例が多い。

裏面は「側張」をつくり、母屋に厚みをもたせる。その側張の手法は大きく2つで、母屋の粘土を削り込むもの（a. 繰取こしらえ、b. 半繰取こしらえ）と粘土板を母屋に貼り付ける（c. 張側こしらえ、d. 裏張こしらえ）ものがある。ここでは、側張a・b・c・d類としておく（第2図右下）。

側張に厚みが出てくることによって、母屋台を保持するために粘土板による「補立」を貼り付けることもしている。また、「把手」は、母屋本体に三日月形の孔を2つあけるもの（a. 繰取）、母屋に粘土紐を貼り付け把手にするもの（b. 付）、前述の補立に孔をあけるもの（c. 補立繰取）がある。それぞれを把手a・b・c類としておく（第2図右上）。

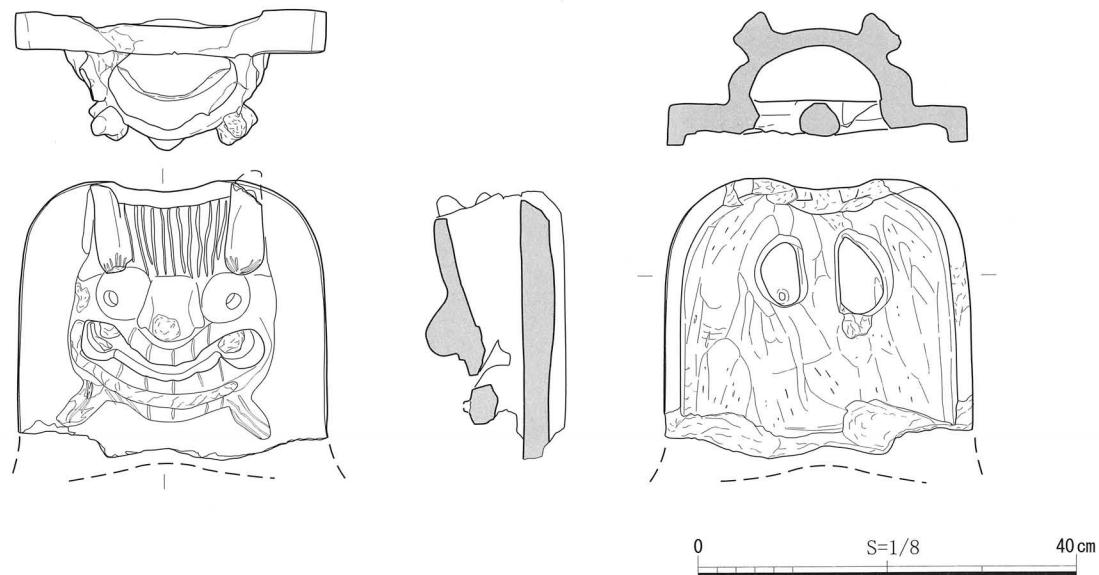
〔祈願・呪文紋瓦〕 鬼面瓦と同様の母屋をもつとともに鰐・鰐足元をつけるものがある。表面には家紋・梵字・七福神などの表現をもち、総じて平面的である。製作手法は、表面・裏面ともに鬼面瓦と同様で、「落込張」・「連珠」・「側張」・「補立」・「把手」の工作がみられる。「側張」や「把手」については、鬼面瓦の分類を使用する。

家紋等の文様のつけ方には、母屋中央部を落込張し、文様を貼り付けるもの（第3図右）と母屋平面に文様を貼り付けるものがある。

3. 田原本町所在社寺等の棟端飾瓦

(1) 多神社

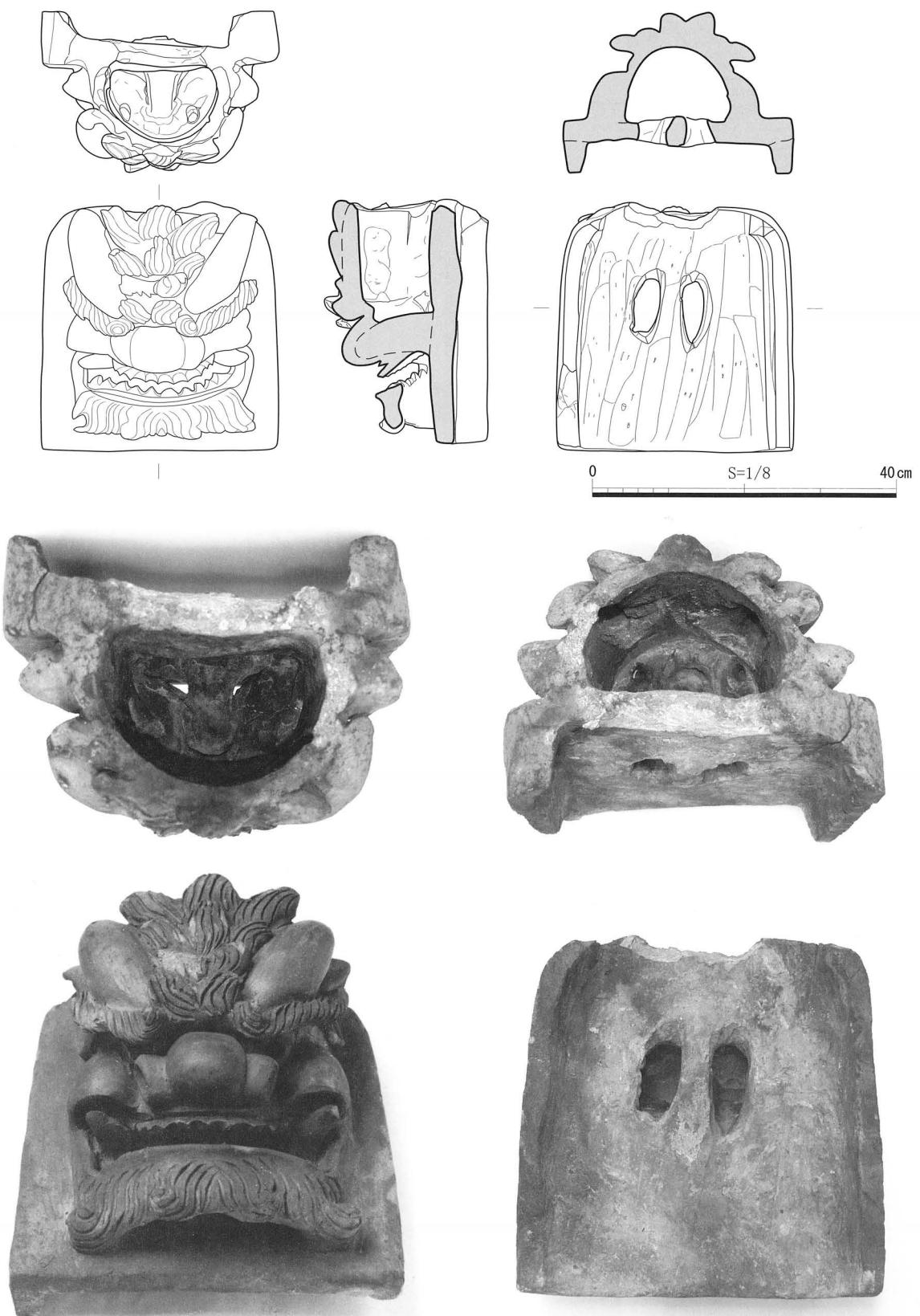
多坐弥志理都比古神社（多神社）は田原本町多字宮ノ内に所在する式内社で、本殿は県の指定文化財になっている。拝殿は平成10年に建替えに伴う発掘調査を実施した。この拝殿は、後述する拝殿大棟の西側の鬼面瓦4の紀年銘から「宝暦九年（1759）」に建造された可能性が高い。なお、多神社の資料館には、この拝殿建替え時に屋根から降ろされた棟端飾瓦等18点が保管されており、今回はその一部である4点を報告する。なお、これら瓦についての詳細は、今後刊行される報告書を参照されたい。



第4図 鬼面瓦1（多神社 拝殿）

鬼面瓦1・2（第4・5図）は、合子型を用いて鬼面を成形するものである。鬼面瓦2の鬼面頭部の横断面は半円形を呈していることから、ほぼ型の形状を推測することができる。鬼面瓦1の下端は打ち割られた可能性があるが、形状としては又縁があり両端はやや広がるように見える。また、母屋中央には割付用と考えられる直線がみられる。裏面は、両者とも削りによって側張（側張b類）を作り出し、中央部には縁取による把手a類があけられている。

鬼面瓦3（第6図）は、側辺に貼付による連珠がつく。また、鬼の頭飾りとして日輪が付けられ、



第5図 鬼面瓦2 (多神社 拝殿)



第6図 鬼面瓦3 (多神社 拝殿)



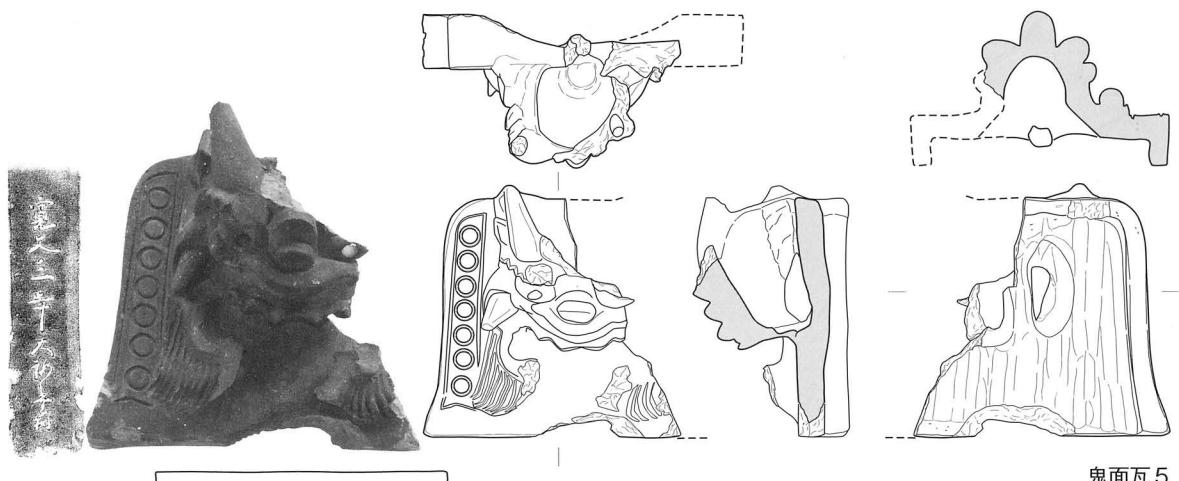
第7図 鬼面瓦4（多神社 拝殿）

この日輪と目、牙にベンガラと思われる赤色顔料が塗布されている。左側面に「寶曆九己卯歲 三月吉日」、右側面に「瓦工 新口村 梶屋傳兵衛」のヘラ書きがある。

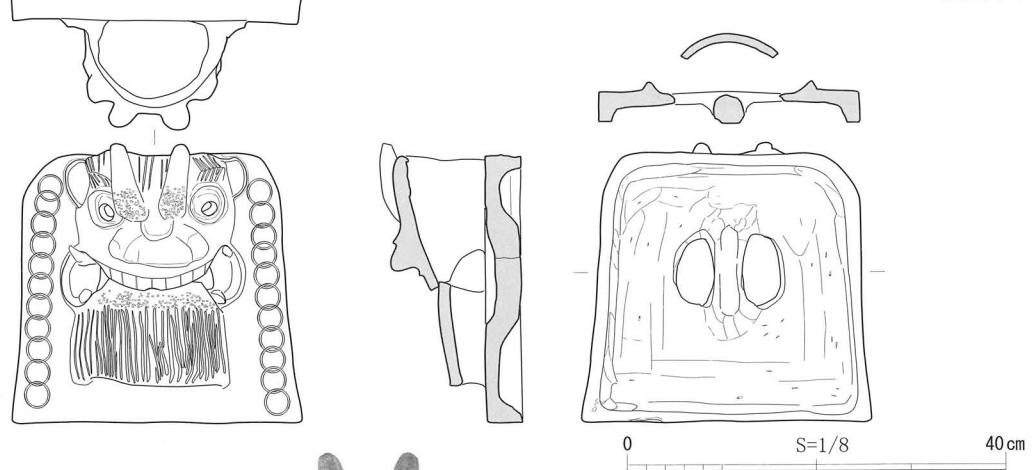
鬼面瓦4（第7図）は、鬼の形相が異なる。頭毛を両側に分け、眉や角がつり上がりらず横方向にとりつく。また、目は突出し平坦にする特徴をもっている。母屋右下に「田瓦平」の押印がある。裏面は、中央に補立を作り、そこに把手の孔（把手c類）をあけている。

（2）多觀音堂

觀音堂は、前述多神社の東方約100mに所在する。「多神宮寺觀音下地田数帳」（天正二年／1686年）に「觀音堂」の記述がみえる。鬼面瓦5～7（第8図）は、平成10年の台風9号に際して觀音堂が破損し、建替えに伴って床下に保管されていた資料である。鬼面瓦5～7のうち、6・7は同形で、後述銘文から同じ工人の作と考えられる。5～7の母屋は、側張が半縁取こしらえの厚みのないも



鬼面瓦 5



S=1/8

40 cm

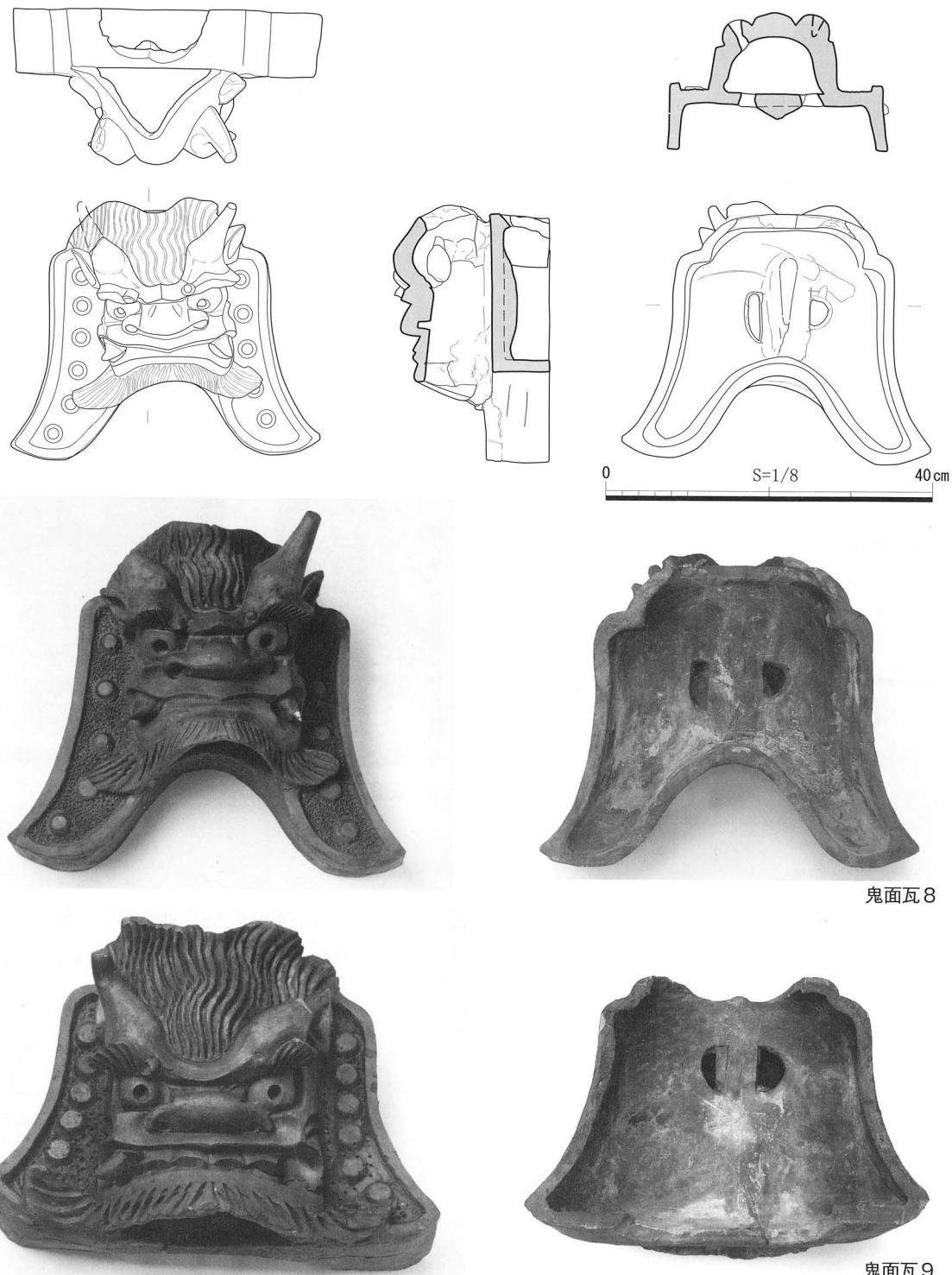


鬼面瓦 6



鬼面瓦 7

第8図 鬼面瓦 5～7 (多觀音堂)



第9図 鬼面瓦8・9（安楽寺 本堂）

ので、把手は繰取のa類である。また、鬼面は合子による成形で、鬼面頭部の横断面は半円形を呈する。側辺部には、竹管の押捺による連珠文が施されている。これらには紀年銘があり、鬼面瓦5と6の左側面にはそれぞれ「寛文三年（1663）」、「宝永六年（1709）」の年号が刻まれている。さらに6の右側面に「多村二ノ口瓦や八兵衛門子 権兵へ 勘四郎」、鬼面瓦7の左側面に「和州十市郡二ノ口村かわらや 権兵へ」、右側面に「多村くわんせ御堂 同勘四郎 八右衛門子」のヘラ描きがある。



第10図 鬼面瓦 8・9 (安楽寺 本堂)

(3) 矢部安楽寺

安楽寺は、田原本町大字矢部字西垣内に所在する。阿弥陀如来坐像（江戸時代前期）を本尊とし、良忍上人坐像（室町時代）や融通念佛縁起図（南北朝／国重要文化財）を所蔵している。後述する鬼面瓦は、平成2年の本堂の瓦葺替え時に降ろされた資料である。

鬼面瓦8・9は、母屋下辺に鰐が付くタイプ（8）と付かないタイプ（9）であるが、鬼面や連珠が同じ作風のものである。両者とも上辺の肩に切込を入れる。また、母屋の周縁は幅1cm程度に立ち上げ、その内部に貼付による連珠文をめぐらしている。側張は、粘土板の貼り付けによって高く作られている。鬼面瓦8・9の裏側の把手は繰取の把手a類であるが、8では把手となる両孔の間に縦方向の粘土を付加し強度を増している。鬼面瓦9には把手孔を穿つために中央に割り付け線を施している。

鬼面瓦8の右側面には「安永九天（年）庚子三月日」、左側面には「新口村瓦工 植屋傳兵衛」の、鬼面瓦9の右側面には「已安永八年 亥十月吉日」、左側面には「新口村瓦工 植屋傳兵へ」のヘラ描きがある。両者の筆致はやや異なるため同工とは断定できないが、同じ工房で製作されたものであろう。このことから、この工房ではこの安楽寺の瓦の製作が少なくとも安永八年10月から同九年3月の期間に及んでいた可能性が考えられる。

(4) 津島神社

津島神社は、田原本町小字九軒町に所在する牛頭天王を祭神とする祇園社で、社殿は天治二年



第11図 鬼面瓦10（津島神社 拝殿）

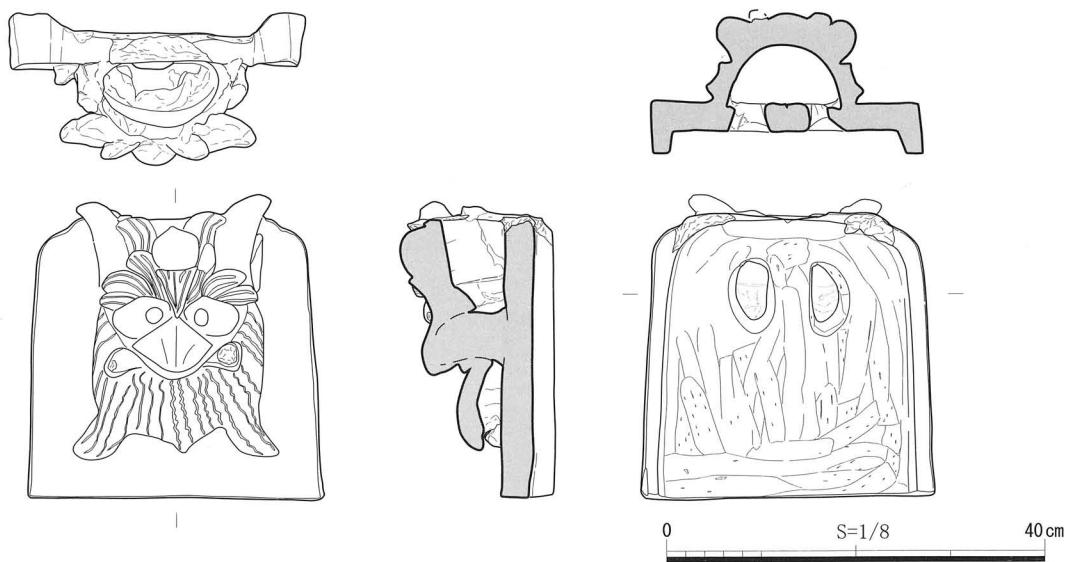
（1125）の再建の棟札から創建はさらに遡ると考えられる。社殿は、その後の数回の再建によって現在に至っている。また、江戸時代には神宮寺の感神院があったが、明治2年（1869）の神仏分離時に廃寺になるとともに、平野家の本貫地（尾張国津島）にあった津島神社にちなみ社名が改められた。

平成19年の拜殿と社務所の建替えに伴い、葺かれていた鬼瓦等を中西秀和氏が調査した。本報告は、中西氏の成果をもとにその一部を掲載する。拜殿と社務所に葺かれた棟端飾瓦の位置は、第4表のとおりである。

鬼面瓦10・11（第11・12図上）は上辺を繰り出し、肩に切込をいれるものである。また、側張は半繰取こしらえ（側張b類）、把手はa類の繰取である。鬼面瓦11には、裏面中央に割付用の直線を縦方向にいれる。鬼面瓦12（第12図下）は、長方形の母屋をもたず縁辺に鰐の装飾を施すものである。顔面には鬼にみられる角や牙が明瞭でないことから、獅子であろう。側張は張側こしらえ、把手は貼付である。

祈願・呪文紋瓦1～3（第13図）は拜殿、4～9（第14～16図）は社務所に葺かれていたものである。祈願・呪文紋瓦3の母屋は長方形、その他は下辺に鰐がつくものである。これらの多くは、上辺肩に切込があるとともに主紋部分は落込張をしている。また、裏面の把手は貼付である。祈願・呪文紋瓦1は鰐足元を付加し、裏側は中央縦方向の補立によって補強している。祈願・呪文紋瓦2には巴紋、3には平野家の家紋である「三鱗紋」がみられる。両者の左側面には「南都細工人米川口」の工人名があるとともに、2の右側面には「瓦平きしん」、3では「慶應二寅年」のヘラ書きがある。

また、3の裏面の左側には「村 森田新七 寄進」のヘラ書きがある。祈願・呪文紋瓦4は、獅子



鬼面瓦11



鬼面瓦12

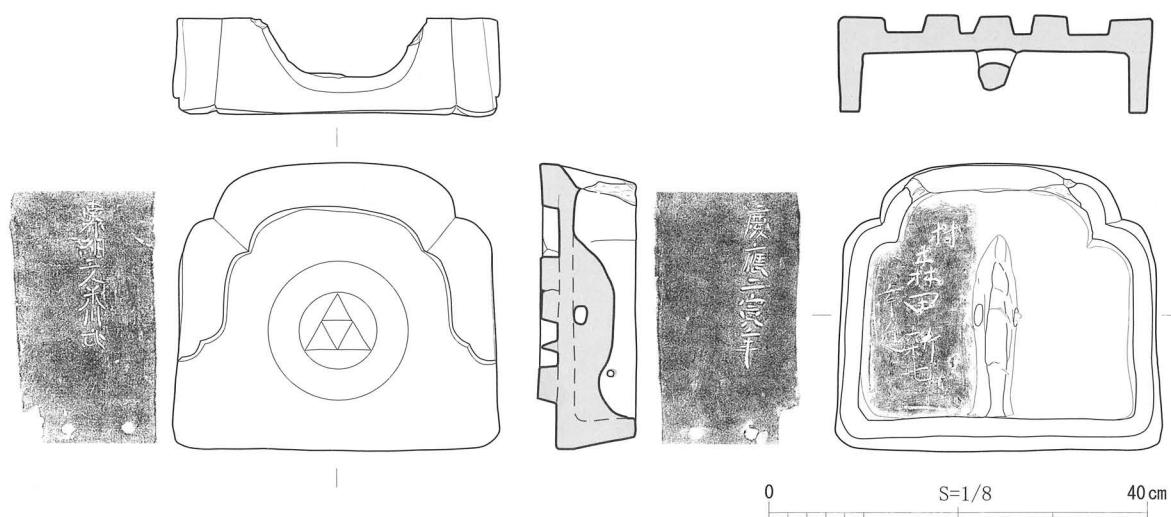
第12図 鬼面瓦11・12 (津島神社 拝殿・社務所)



祈願・呪文紋瓦 1



祈願・呪文紋瓦 2



祈願・呪文紋瓦 3

第13図 祈願・呪文紋瓦 1～3 (津島神社 拝殿)



祈願・呪文紋瓦4



祈願・呪文紋瓦5

第14図 祈願・呪文紋瓦4・5 (津島神社 社務所)



祈願・呪文紋瓦 6



祈願・呪文紋瓦 7

第15図 祈願・呪文紋瓦 6・7 (津島神社 社務所)



祈願・呪文紋瓦 8



祈願・呪文紋瓦 9

第16図 祈願・呪文紋瓦 8・9 (津島神社 社務所)

口瓦と折衷したもので上辺に経の巻をつける。母屋周縁には粘土貼付による連珠がめぐり、中央には落込張によって木瓜紋（五瓜に唐花）を貼り付けている。この家紋は、祇園社に多くみられるもので当社も神紋として採用されているのであろう。左側面に「嘉永元 申十月日」、右側面に「三輪里（町）瓦屋善四郎 内富吉才工」のヘラ書きがある。

祈願・呪文紋瓦5は、範による木瓜紋（五瓜に唐花）をつける。左側面に「三己（わ）町 瓦屋善四郎内富吉才工」、右側面に「嘉永元 申十月日」のヘラ書きがあり、4と一連のものであろう。

祈願・呪文紋瓦6～8は、同形・同紋のものである。6の左側面に「邑」、右側面に「邑瓦サ」、7の右側面の上部に「瓦サ」、下部に「嘉永元年申十月」、8の右側面には「邑瓦佐」のヘラ書きがあり、いずれも同工のものであろう。



第17図 祈願・呪文紋瓦10・隅蓋瓦1（楽田寺）

祈願・呪文紋瓦9は、凡字部分を落込張にし、その部分に漆喰を貼っていたようでその一部が残存する。

(5) 楽田寺

楽田寺は、田原本町字堺町に所在する寺院で、天平元年（729）の創建と伝えられるが詳細は不明である。室町時代中期には、「平坊二十ヶ所計也」（「大乗院寺社雜事記」）とあり、寺内町の南部東半は、この寺院が占めていた可能性がある。本堂は延享三年（1746）以前、釣鐘門は寛延二年（1749）の建築である。平成19年の改築に伴い棟端飾瓦が落ろされ、中西氏によって調査された。その一部の紀年名のあるものを説明する。

祈願・呪文紋瓦10（第17図上）は、中央部に祐翁の造形物を貼り付ける。下辺の両側には鰐が付

くが、側辺からの側張を下辺まで連続して作り一体化している。右側面に「田原本三己（わ）町瓦ヤ富吉才工」、左側面に「嘉永四 亥五月日」のヘラ描きがある。

隅蓋瓦1（第17図下）の蓋部は、三叉状の凹部を有するもので、2ヶ所に直径0.7cmの円形孔があく。蓋部には下り獅子と牡丹が造形されている。蓋部に「田原本 三輪町 瓦ヤ 富吉 細工人 天保十 己亥十月 吉日」のヘラ描きがある。

（6）鏡作神社

田原本町八尾字ドウズに所在する式内社である。中世には神宮寺の真言宗聞楽院が西側に存在していた。本報告の棟端飾瓦は、この旧堂に伴うものであろう。

鬼面瓦（第18図上）は、大きさからして旧堂の大棟に葺かれていたと思われるものである。側辺には鰐がつき、側辺から鰐にかけて貼付の連珠文をめぐらしている。上辺肩には切込をいれる。裏面には十字形の補立をつけ、円孔を穿つことにより把手としている。台部には、乾燥時の補強のためと思われる最大長16.2cm・最大幅2cmの当て具痕跡がある。右側面には「今里村 瓦師平七」のヘラ描きがある。

隅蓋瓦2（第18図下）は、丸瓦のほぼ中央には、左足を上げ、右手に提燈、左手に棍棒をもつ鬼が造形されている。また丸瓦内面には布目压痕が残る。鬼の背面には「八百村 明和五子年 堀内氏作」のヘラ描きがある。

（7）善照寺

善照寺は、田原本町大木字タカハシに所在する。寛政二年（1790）の「御坊付末寺触下地頭付年号年曆控」に寺号がみられ、少なくともこの頃には存在していた。報告する鬼面瓦は、平成6年（1994）におこなわれた本堂の改築に伴い散在していたものを中谷義弘氏が採集した資料である。

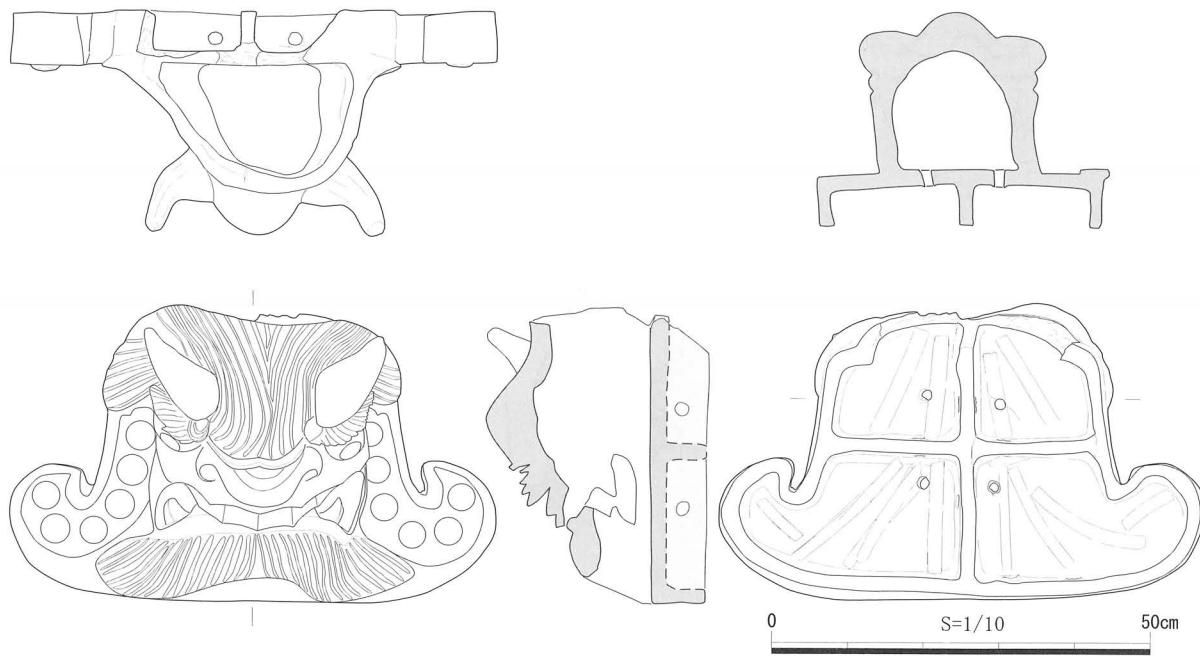
鬼面瓦14（第19図）は、左右の鰐足元部分が欠損しているが、打ち割り整えたものであろう。上辺は肩切込を入れる。側辺の文様は、側辺に沿って輪郭線を入れ、その内部に竹管による連珠を押捺している。鬼の頭部には、頭巾と思われる頭飾りがつく。右側面に「和州安倍村瓦屋庄治郎作」、左側面に「元禄十六年 藤原正重」、上辺に「未九月吉祥」のヘラ描きがある。側張は粘土板の貼付、把手は縦取で大きくあけられている。

鬼面瓦15・16（第20図・21図上）は、いずれも右側面に「宝曆十式午八月日」、左側面に「大きい物兵へ」、「大きい惣兵衛」のヘラ描きがあるもので、阿吽一対の鬼面瓦と思われ、同一工人によるものであろう。ただし、鬼面の作風を変えており、15では角が内向きで髭が点描であるのに対し、16では角を直立させ髭は縦線で表している。側張は粘土板の貼付で、厚みがある。把手は縦方向の貼付把手である。

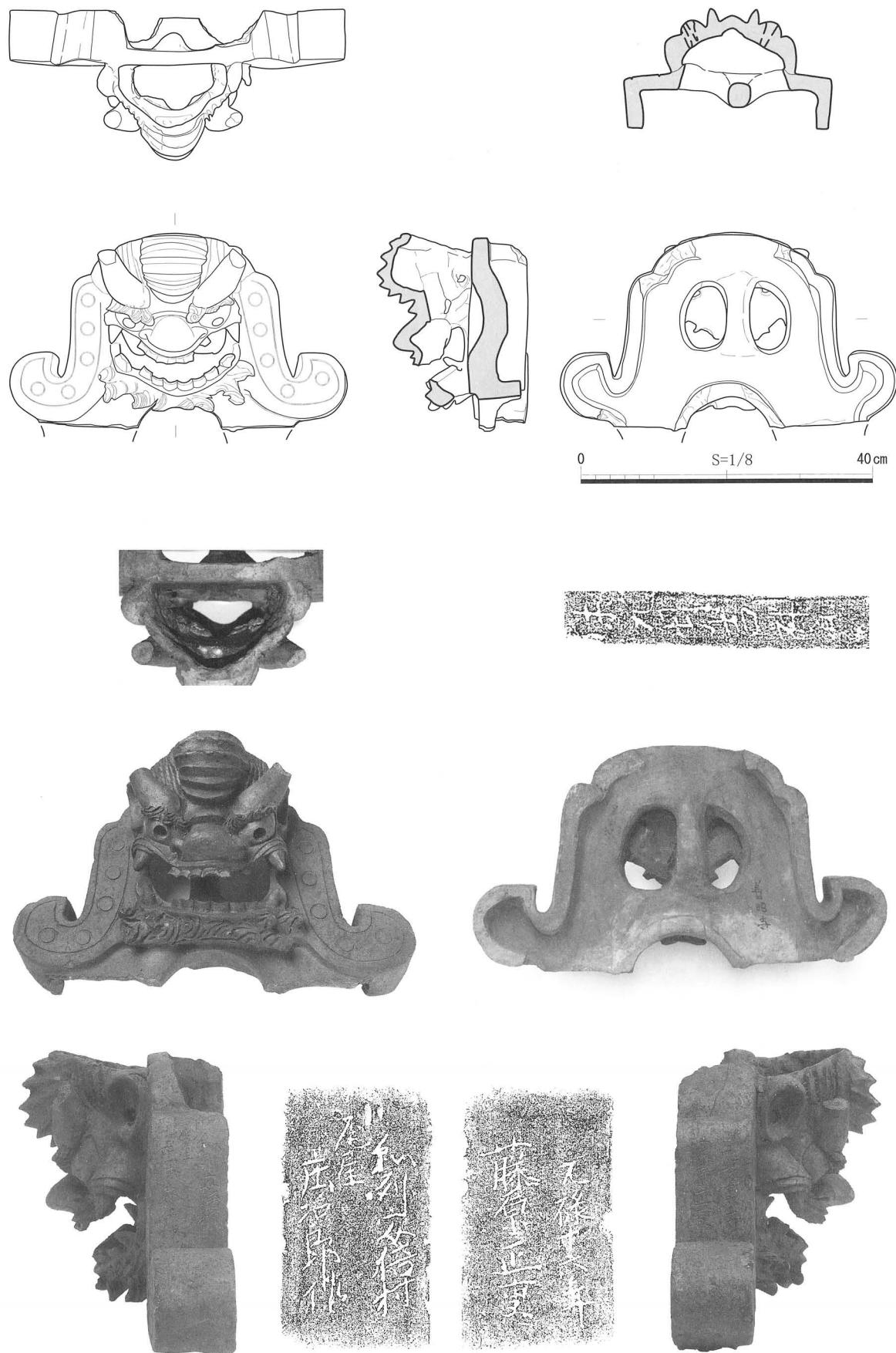
鬼面瓦17（第21図）は、鬼面部分を落込張し、上辺肩は斜めにカットする。側辺には鰐が付き下辺に至るが、下辺は直線的でない。下辺中央部が欠損しているため、その形状は不明であるが、又縦のように凹部をもつてなく逆に突出するようである。把手は、鬼面瓦15・16と同じである。

（8）佛光寺

田原本町大木字カイトに所在する。「融通大念佛記録」に「和州城下郡大木村道場 代々看坊当村無住 此道場從古在之開基年曆不分明」とあり、詳細については不明である。現在は薬師堂が残っている。本報告の鬼面瓦は、平成3年（1991）におこなわれた庫裏の建替えに伴って降ろされた資



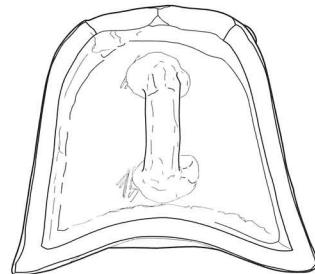
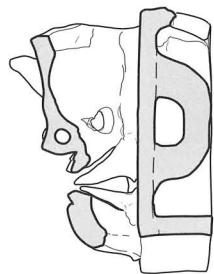
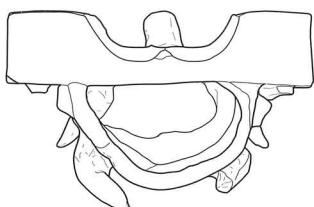
第18図 鬼面瓦13・隅蓋瓦 2 (鏡作神社)



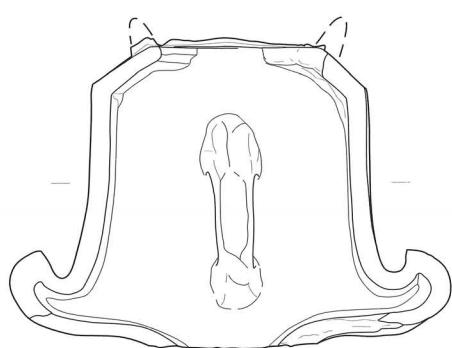
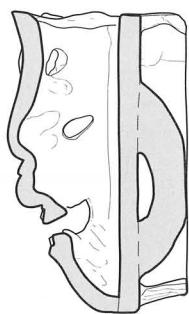
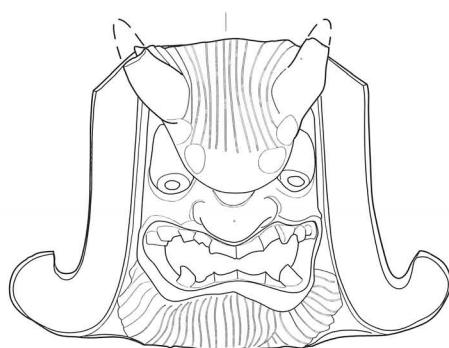
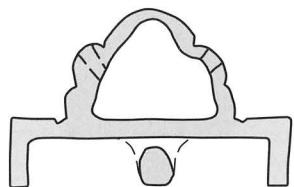
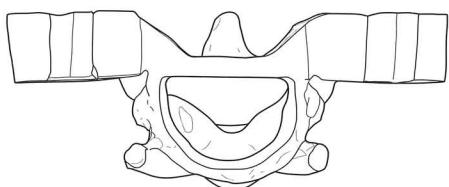
第19図 鬼面瓦14（善照寺）



第20図 鬼面瓦15・16 (善照寺)



鬼面瓦15



0 S=1/8 40 cm



鬼面瓦17

第21図 鬼面瓦15・17 (善照寺)



鬼面瓦18



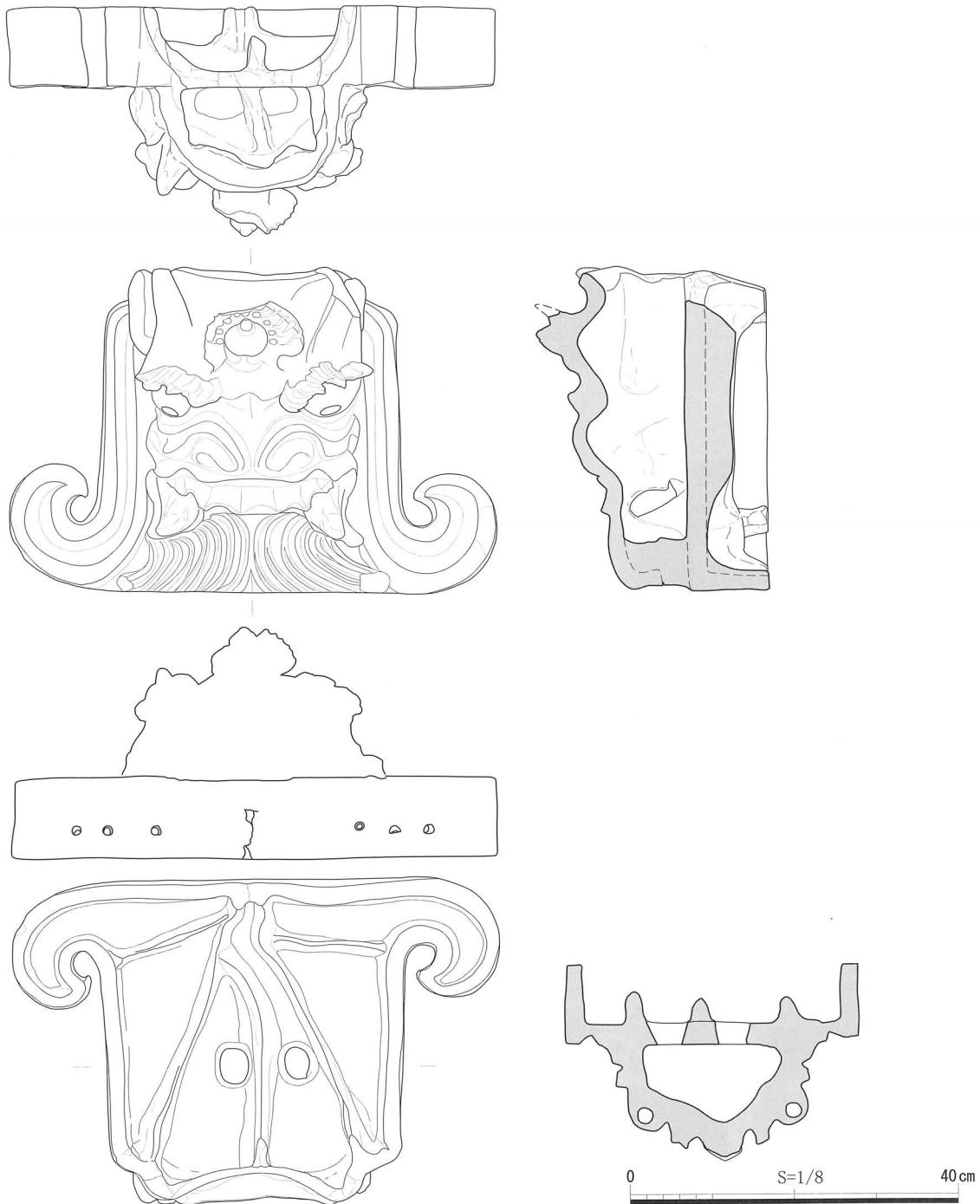
鬼面瓦19

第22図 鬼面瓦18・19 (佛光寺)

料である。

鬼面瓦18（第22図上）は、鰐と鰐足元がつくタイプである。鬼面部分を落込張し、上辺肩部に切込を入れる。背面の把手は縁取である。

鬼面瓦19（第22図下・23図）は、側辺に鰐がつき渦状の彫文様を施している。この彫文様は、鼻表現にも特徴的に表れている。鬼の頭には宝珠を付けている。大型品であるため、裏面には下辺から放射状に補立が付けられている。把手は縁取によるもので丸くあけている。右側面に「□佐平次」、



第23図 鬼面瓦19（佛光寺）

左側面に「延享四年 卯ノ二月日」のヘラ書きがある。

(9) 教安寺

田原本町大安寺字ソノゾエに所在する。本堂は元禄五年（1692）に再建され、嘉永七年（1854）の大地震に際して大改修がおこなわれている。平成6年（1994）には、本堂・山門の建替えがおこなわれ、本堂に葺かれていた鬼面瓦も降ろされた。本資料はその瓦である。

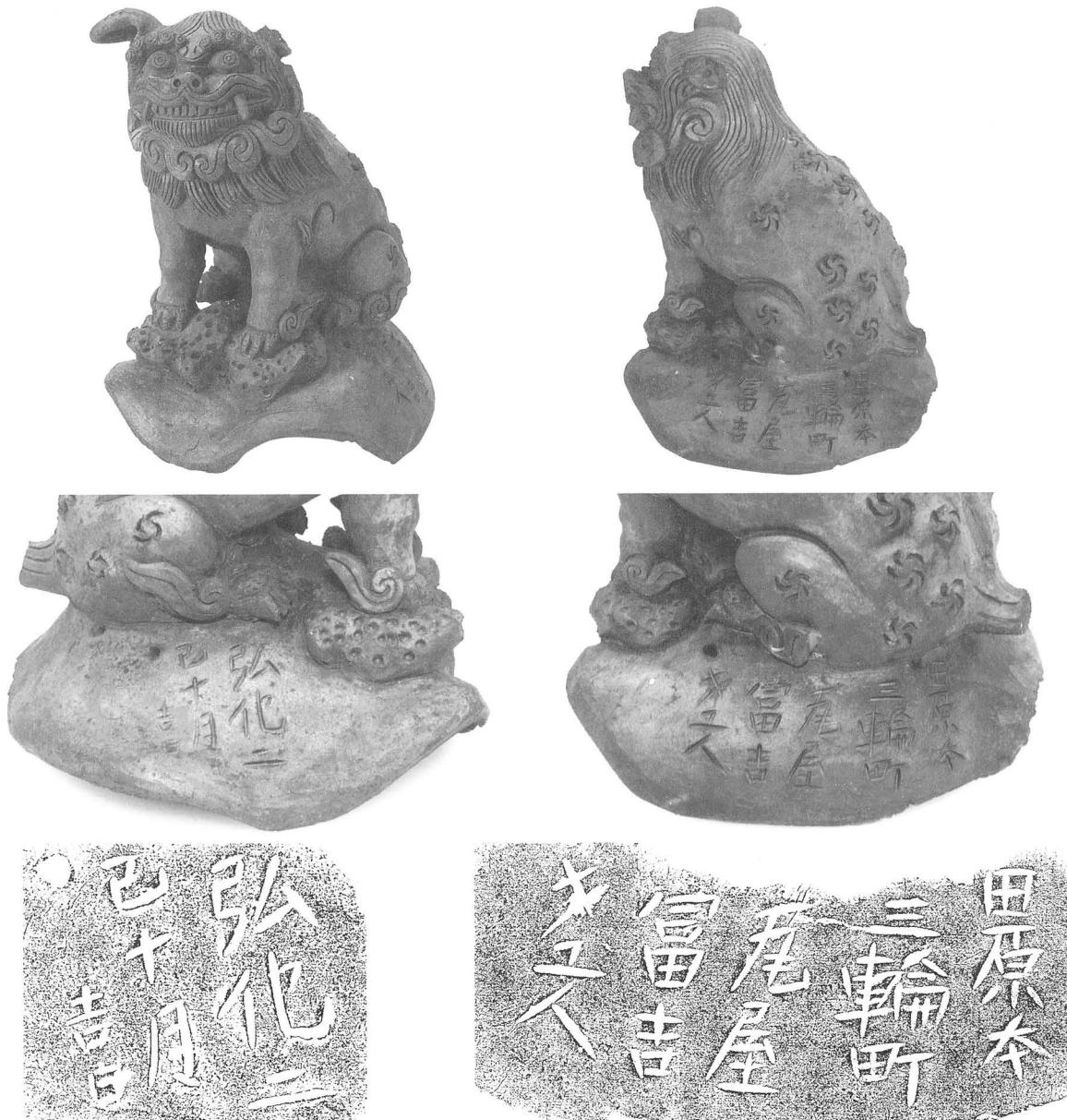
鬼面瓦20（第24図）は、下辺が緩やかに拡がる母屋を有するものである。鬼の容貌は、目・眉・耳など各部位が立体的に表現されており、形相として際立った造形である。特に頭頂部が高く作ら



第24図 鬼面瓦20 (教安寺 本堂)

れているため、立体的になっている。側張は、粘土板の貼付で側厚は高い。右側面に「田原本三己（わ）町か己（わ）らやとめきち 才工」、左側面に「弘化二 巳十一月吉日」のヘラ書きがある。把手は縦方向の貼付把手である。

隅蓋瓦3（第25図）は、三叉状の凹部を有する土台の蓋に獅子の造形物を貼り付けたものである。蓋部左側に「弘化二 巳十月 吉日」、右側に「田原本三輪町 瓦屋 富吉 才工人」のヘラ書きがある。この銘文は、前者鬼面瓦20と漢字・かなの違い等一部みられるものの「本」・「才工」の筆跡は同じ



第25図 隅蓋瓦3（教安寺）

であることから、同工の作と考えてよい。二者の製作には1ヶ月の差がある。作風は、鬼面瓦と同様、獅子の容貌に立体感があり、よく似ている。蓋の土台部分には、直径0.6cmを測る円形孔を5ヶ所あける。

(10) 浄福寺

田原本町蔵堂字中垣内に所在する。元亀二年（1571）の開基とされ、文政七年（1824）の「万歳帳」から「東浄福寺」・「西浄福寺」の存在が知られている。現在の浄福寺は、「東浄福寺」に当たる。本堂は上層六角、下層方形の構造をもち、棟札から慶応二年（1866）の建築である。本資料の詳細は不明である。

鬼面瓦21（第26図上）は、左右の鰐足元が欠損しているが、故意に打ち割り整えていると思われる。上辺は肩に切込をいれる。鬼面部は落込張で、鬼の頭には日輪がつけられている。裏面は線取



第26図 鬼面瓦21～23（淨福寺・光源寺・大念寺）

による把手a類である。側張は削り出しと思われ、薄い。

(11) 光源寺

田原本町金沢字カイトに所在する。安永三年の文書に、「抑当寺建立ハ雖及四拾余歳ニ」とあり、江戸時代中期の創建と考えられる。鬼面瓦22（第26図中）の鬼は、目が強調され、鼻周囲に平坦面をもつ特徴ある容貌である。上辺の肩切込はない。側辺は下辺に向かって緩やかに拡がるタイプである。側張は粘土板の貼付で、把手は縦方向の貼付把手である。

(12) 大念寺

大念寺は、桜井市東田に所在する。鬼面瓦の詳細は不明である。鬼面瓦23（第26図下）の鬼の頭飾りには、宝珠が付けられている。左側面に「大安寺村 うノ三月日」のヘラ書きがある。裏面の把手は繰取による把手a類である。

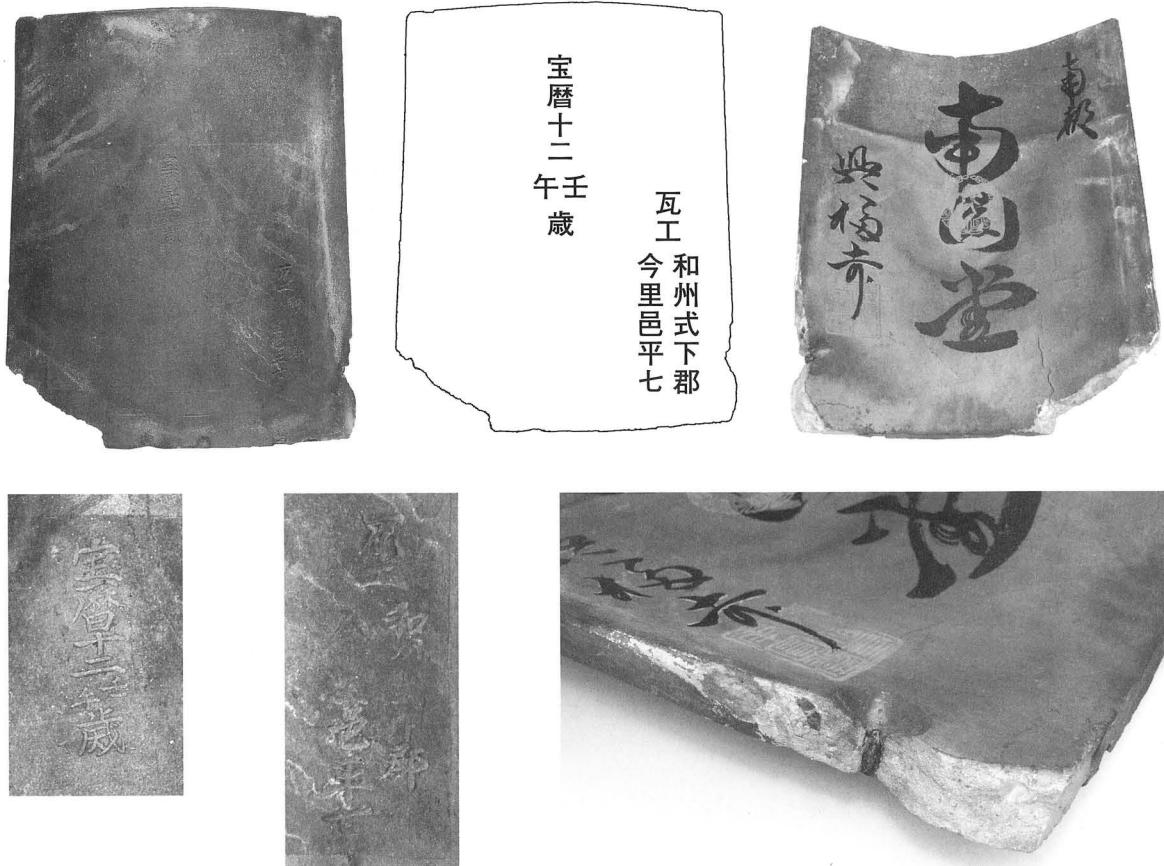


第27図 祈願・呪文紋瓦11・12（中谷家）

(13) 大木・中谷家

中谷家は、田原本町の東部に位置する大字大木に所在する。この集落は、発掘調査の成果から中世以降に成立したと思われ、江戸時代を経て現代に至っている。中谷家はこの大木集落のほぼ中央に位置している。本報告資料は、平成17年（2005）におこなわれた中谷義弘家の納屋の改修時に降ろされた瓦である。この建物は、明治29年（1896）に建てられたものであるが、後述するように江戸時代の棟端飾瓦なども再利用されたと考えられる。

祈願・呪文紋瓦11（第27図上・下左端・下右2）・12（第27図中・下左2・下右）は、同形でともに鰐と鰐足元がつき、さらにその下にギボウシの葉の形状をしたもののがとりつき、下辺を作っている。11の主紋は菊花、12の主紋は牡丹で、細やかな粘土細工で貼り付け、また、透かしを入れるなど表現が豊かである。11・12の右側面には「田原本三巳（わ）町 瓦ヤ富吉才工」、左側面に「嘉永四亥五月日」のヘラ書きがあることから、同一工人によるものと推定でき、前述のようにその作風も同じである。この銘文にみられる「瓦ヤ富吉」は、教安寺の鬼面瓦20・隅蓋瓦3にみられる銘文の工人と同じであり、「本」・「巳」・「瓦」・「才工」など共通する筆跡がみられる。



第28図 平瓦（興福寺 南円堂）

(14) 「南都 南円堂 興福寺」銘平瓦

西克晏氏（田原本町魚町）が所蔵する平瓦（第28図）で、凹面に「南都 南円堂 興福寺」の墨書、「西國第九番」「興福寺南圓堂」の朱印がある。興福寺南円堂の瓦葺き替えを記念して、配布された瓦と考えられるものである。

広端の一部を欠損する。凸凹面・小口とも丁寧なナデが施され、縄目などの痕跡はみられない。凸面には縦25.4cm、横28.8cmを測る方形のナデ残しがみられ、中央上に「宝曆十二壬午歲」、右下に「瓦工 和州式下郡 今里邑平七」の押印がある。広端の両端には、凹面側から外径約4cm、内径約1.2cmを測る漏斗状の釘穴がみられ、凸面からみて左側には鉄釘の一部が残存する。凹面は狭端側の端部から約12cmの範囲が変色し、瓦を葺いていた際の痕跡と考えられる。

4. 棟端飾瓦の製作と瓦屋・瓦師の分布・流通

(1) 鬼面瓦の変遷

鬼面瓦の変遷については、小林氏が既にその詳細を論じているが、奈良盆地中央部の近世鬼面瓦の傾向を一応とらえておくことにする。報告した鬼面瓦のうち、紀年銘をもつ資料は10点である（第1表）。最も古い資料は多觀音堂の鬼面瓦1で寛文三年（1663）、逆に最も新しい資料は教安寺の鬼面瓦20で弘化二年（1845）である。1700年代を中心に前後40～60年の空白期間がみられる。これら資料は数量的な確保ができない点や鬼面瓦という個性的な作品であることから、おおまかに傾向のみ示しておこう。

母屋の形態では、鰯のつかないタイプで一つの傾向が読み取れる。これは下辺の左右端部に広がりがみられることで、新しくなるほど側辺部の下辺ちかくが大きくアールをもつようになる。側張の手法は、縁取あるいは半縁取から張側こしらえになり、厚みのある（立体的な）側張に変遷していく。また、鬼面部分は、古いタイプでは多觀音堂例のように合子型を使用するため、鬼面上部（頭部）が鬼面下部（口・額部部分）より立体的な作りになっているが、新しくなるとその高低差は少なくなる傾向がみられる。側辺の連珠では、竹管の押捺から連珠玉の粘土貼付になる可能性がある。裏面の把手では、縁取の把手から補立縁取や貼付把手へと変遷するようである。このように見えてくると、その工作は18世紀中頃に一つの画期がみられるようで、鬼面瓦の造形が立体的・華美になっていくことが言えそうである。

（2）祈願・呪文紋瓦について

祈願・呪文紋瓦については、報告資料に限りが有り言及できないが、津島神社や楽田寺、中谷家の幕末の資料がある。これらの多くは、「田原本三輪町瓦や富吉」銘であり同一工人によるものである。したがって、その他の工人の動向が把握できていないので課題が多い。ただし、この工人は鬼面瓦も製作しており、その細工は連動している。また、祈願・呪文紋瓦が民家の屋根を飾っており、幕末になると民家の瓦葺きが普及していたことが傍証される。

（3）瓦屋・瓦師と瓦の生産流通について

報告した棟端飾瓦のうち瓦屋・瓦師等の銘文をもつ瓦は28点を数える（第1表）。これらの瓦屋・瓦師をまとめると大きく以下のようになる。

1. 「和州十市郡二ノ口村かわらや権兵へ」・「同勘四郎 八右衛門子」（多觀音堂）や「瓦工新口村 梶屋傳兵衛」（安樂寺）の銘文をもつ新口村の工人
2. 「瓦屋（ヤ）富吉（とめきち）才工人（才工）」（教安寺・津島神社・楽田寺）・「三己（わ）町 瓦ヤ善四郎内富吉才工」（津島神社）などの銘文をもつ田原本三輪町の工人
3. 「八百村（中略）堀内氏作」（鏡作神社）の工人
4. 「今里村 瓦師平七」（鏡作神社）の工人

このほか、「細工人米川□□」（津島神社）¹¹⁾については、田原本町新町の可能性がある。また、「佐平次」・「邑瓦佐（サ）」・「田瓦平」銘の工人については、その所在地が特定できないものもある。

1つ目の新口村の工人である「和州十市郡二ノ口村かわらや権兵へ」「宝永六（1709）」と「瓦工新口村 梶屋傳兵衛」「宝曆九（1759）」「安永八／九（1779／1780）」については、50年・20年の時期差が認められるが、同一の瓦屋の可能性が高いであろう。この「二ノ口」・「新口村」は樋原市新ノ口に比定でき、これら的一群の瓦は、多神社・安樂寺の他にも「梶屋傳兵衛」と思われる銘をもつ棟端飾瓦が秦樂寺南側の拝殿風建物（田原本町秦樂寺）や蓮休寺（田原本町薬王寺）、淨教寺（三笠）に存在しており、田原本町南部を中心に供給されたようである。

2つ目の「瓦屋（ヤ）富吉（とめきち）才工人（才工）」銘をもつ棟端飾瓦は、天保十年（1839）から嘉永四年（1851）の12年間にみられる。その筆跡は同じであり、瓦の作風も類似していることから同一工人と考えて間違いないであろう。また、津島神社の嘉永元年（1848）の祈願・呪文紋瓦4・5には「瓦屋善四郎 内富吉才工」の銘があり、この「瓦屋善四郎」は中西氏の調査によれば田原本町五軒町村田東平家東棟の棟端飾瓦にも正徳四年（1714）の「瓦屋善四郎」銘が存在してい

第1表 棟端飾瓦 銘文一覧表

瓦番号	所在	西暦	紀年名	瓦屋・瓦師銘等
鬼面瓦5	多觀音堂	1663	「寛文三年」	「大路堂村」
鬼面瓦14	善照寺	1703	「元禄十六年」「未九月吉祥」	「藤原正重」「和州阿倍村瓦屋庄治郎作」
鬼面瓦6	多觀音堂	1709	「宝永六年 丑ノ七月吉日」	「多村二ノ口瓦や八兵衛門子 権兵へ 勘四郎」
鬼面瓦18	佛光寺	1747	「延享四年卯ノ二月日」	「佐平次」
鬼面瓦3	多神社	1759	「寶曆九巳卯歳 三月吉日」	「瓦工新口村 梶屋傳兵衛」
隅蓋瓦2	鏡作神社	1768	「明和五子年」	「八百村堀内氏作」
鬼面瓦15/16	善照寺	1762	「宝曆十弐午八月日」	「大かい惣兵衛」/「大かい惣兵へ」
平瓦	興福寺	1762	「宝曆十二壬午歳」	「瓦工和州式下郡今里邑平七」
鬼面瓦8	安樂寺	1779	「巳安永八年 亥十月吉日」	「新口村瓦工 梶屋傳兵衛」
鬼面瓦9	安樂寺	1780	「安永九年 庚子三月日」	「新口村瓦工 梶屋傳兵衛」
隅蓋瓦1	樂田寺	1839	「天保十 巳亥十月 吉日」	「田原本 三輪町 瓦ヤ 富吉 細工人」
鬼面瓦20	教安寺	1845	「弘化二巳十一月吉日」	「田原本三己(わ) 町かわらやとめきち才工」
隅蓋瓦3	教安寺	1845	「弘化二己十月吉日」	「田原本三輪町瓦屋富吉才工人」
祈願・呪文 紋瓦4	津島神社	1848	「嘉永元 申十月日」	「三輪里(町) 瓦屋善四郎 内富吉才工」
祈願・呪 文紋瓦5	津島神社	1848	「嘉永元 申十月日」	「三己(わ) 町 瓦ヤ善四郎内富吉才工」
祈願・呪 文紋瓦7	津島神社	1848	「嘉永元年 申十月」	「瓦サ」
祈願・呪 文紋瓦10	樂田寺	1851	「嘉永四亥四月日」	「田原本三己(わ) 町 瓦ヤ富吉才工」
祈願・呪 文紋瓦11	中谷家	1851	「嘉永四年亥五月日」	「田原本三己(わ) 町瓦ヤ富吉才工」
祈願・呪文 紋瓦12	中谷家	1851	「嘉永四年亥五月日」	「田原本三己(わ) 町瓦ヤ富吉才工」
祈願・呪文 紋瓦3	津島神社	1866	「慶応二寅年」	「南都細工人米川□」「村森田新七寄進」
鬼面瓦4	多神社			「田瓦平 (箱囲押判)」
鬼面瓦7	多觀音堂			「和州十市郡二ノ口村かわらや権兵へ」 「多村くわんせ御堂 同勘四郎 八右衛門子」
祈願・呪文 紋瓦2	津島神社			「南都細工人米川□□□」「瓦平きしん」
祈願・呪文 紋瓦6	津島神社			「邑瓦サ」「邑」
祈願・呪文 紋瓦8	津島神社			「邑瓦佐」
鬼面瓦13	鏡作神社			「今里村 瓦師平七」
鬼面瓦23	大念寺		「うノ三月日」	「大安寺村」

第2表 「堀内」銘をもつ瓦製狛犬・露盤等〔奈良文化財同好会1987に加筆作成〕

製品名	所 在 地	銘 文	西暦
露 盤	石橋家 磯城郡田原本町宮古	宝暦十四 申五月 八百村町堀内文右門	1764
瓦製狛犬	杵築神社 天理市南六條町	八百堀内氏作 明和四亥年	1764
隅蓋瓦	鏡作神社 磯城郡田原本町八尾	八百村 明和五子年 堀内氏作	1767
瓦製狛犬	巖島神社 大和高田市日ノ出東本町	明和六年 式下八百村 堀内氏作	1768
瓦製狛犬	白坂神社 大和郡山市白土町	八百村堀内作 明和八卯年	1771

る。このことから、「瓦屋善四郎」は屋号であり134年間数代にわたって田原本三輪町に瓦屋が存続し、寺内町を構成する津島神社や楽田寺、周辺の民家に瓦を供給していたことがわかる。

3つ目の「八百村（中略）堀内氏作」は、田原本町八尾にあった瓦屋で、八尾の鏡作神社のほか杵築神社（天理市）・巖島神社・白坂神社（大和高田市）の瓦質狛犬に同様の銘文が認められ¹²⁾、実見した杵築神社（天理市）の瓦質狛犬の銘文はヘラ書きの筆跡も類似する。また、宮古石橋家所蔵の「唐人」銘露盤には「八百村町堀内文右門」の名があり、宝暦十四年（1764）の作であることが明らかになっている¹³⁾。このように1764年から1771年の間に集中していることから、同一の作者の可能性が高い（第2表）。

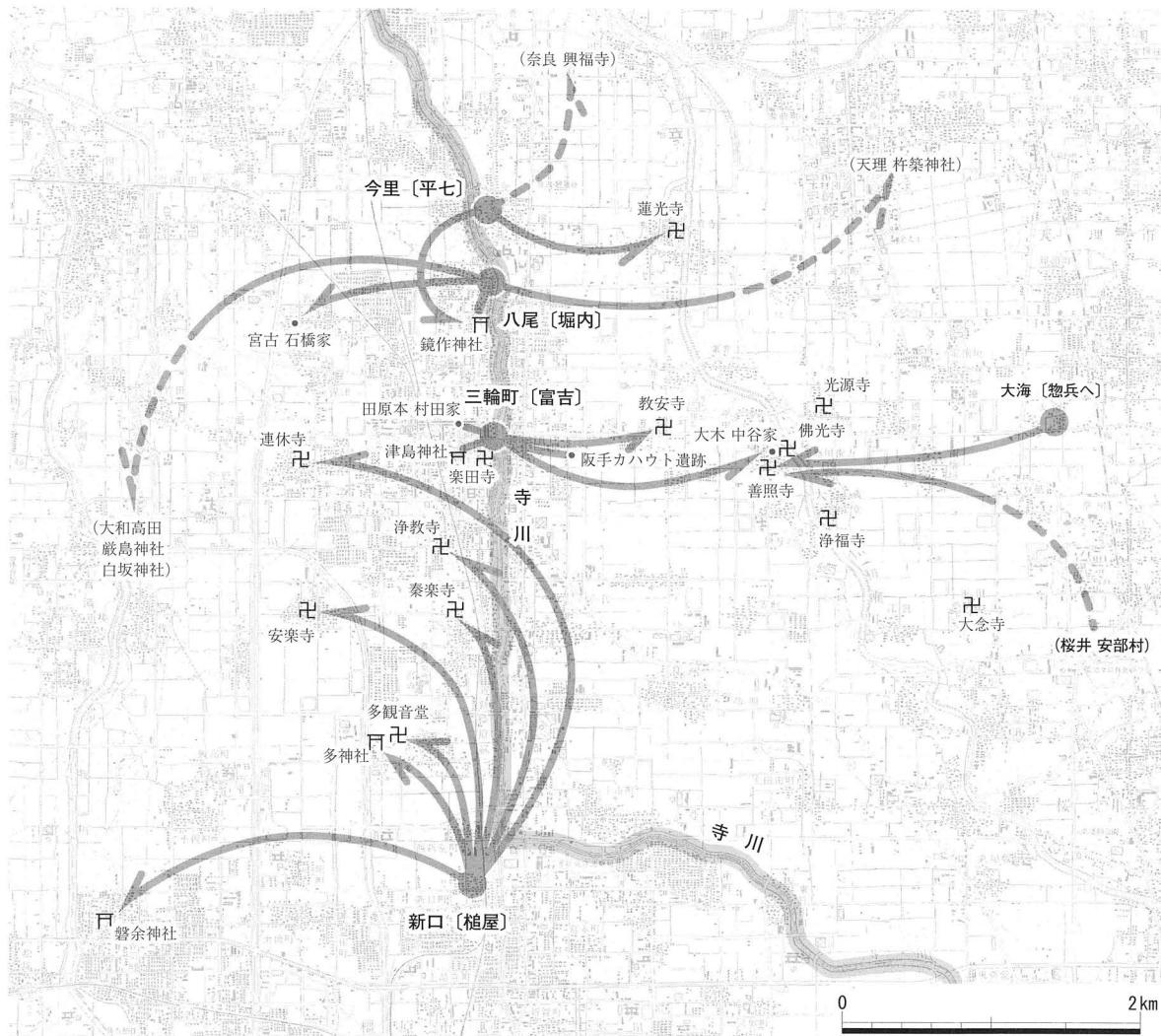
「今里村 瓦師平七」銘は、「宝暦十二壬午歳」（1762）の銘文をもつ興福寺の平瓦にみられることがから、製作の定点となる。この「今里村 瓦師平七」銘は、法貴寺蓮光寺の鬼面瓦にもあり、その近在に瓦を供給していたことが知れる。

さらに「新口村」・「今里」という銘文も、杵築神社・夜都伎神社（天理市）・御櫛神社（平群町）の瓦質狛犬の類例がみられ（第3表）¹⁴⁾、田原本周辺の瓦屋・瓦師が近在だけでなく広範囲にわたって活動していたと想定できる。

第3表 「新口村」・「今里」銘をもつ狛犬〔奈良文化財同好会1987に基づき作成〕

製品名	所 在 地	銘 文	西暦
瓦製狛犬	杵築神社 天理市上ノ庄町	天保二卯六月吉日 今里南 瓦清／是南瓦 清五郎	1831
瓦製狛犬	夜都伎神社 天理市乙木町	天明四甲辰歳三月吉日 十市郡新口村 人形屋治助作	1784
土製狛犬	御櫛神社 平群町櫛原	寛政五年丑十二月吉日 十市郡新口村 櫛屋□□作	1793

さて、「新口村」・「田原本三輪町」・「八百」・「今里村」に所在したこれら工人の工房が、寺川沿いに分布していることは注目される。おそらく、薪や粘土の原料から製品の流通に寺川の水運が大きな役目を果たしていたのであろう。また、小林氏の教示によれば、水運を利用した資材や瓦の運搬のほか、瓦の製作には焼成窯が築造された可能性があるという。これまで田原本町内では、江戸時代の瓦屋を発掘した例はないが、窯の構造や技術とあわせて今後の課題である。



第29図 瓦の製作地とその供給先 (S = 1/40,000)

このようにみてくると、近世田原本周辺の瓦生産が活発な経済活動になっていたことが類推でき、近世田原本が「大阪の堺」といわれていたことも首肯できるのである。近世の棟端飾瓦は、現在でも社寺や民家の屋根に葺かれている例も多く、これまで考古学的な研究対象となり難かった。ただし、こうした資料には紀年や瓦屋・瓦師の銘文をもつ例も少なくなく、その編年や生産・流通の問題を考える上で、多くの情報をもっている。本稿の報告した棟端飾瓦は、田原本町内のごく一部の資料であるが、今後、町内や周辺地域において資料の蓄積が図られることによってより広範な地域における変遷と地域性、生産・流通の問題が提起されることを期待したい。

最後に、今回の報告は中西秀和氏の調査の成果がなければ為し得なかったものであり、改めてお礼申し上げます。また、中谷義弘氏には資料の提供を快諾して頂きました。棟端飾瓦の観察では故・小林章男氏、銘文の解読は谷山正道先生（天理大学教授）から多くの教示を得ました。また、作図に当たっては、奥谷知日朗氏の協力があり、重ねてお礼申し上げます。

註

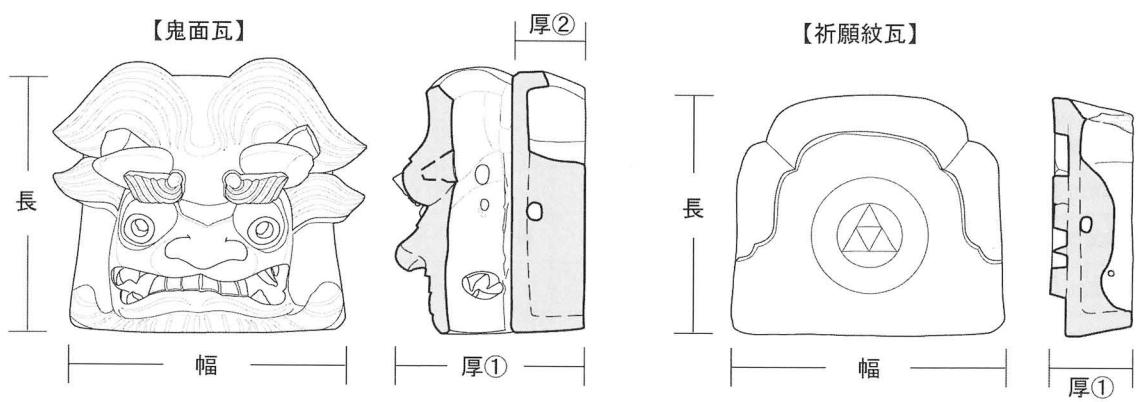
- 1) 清水琢哉1999「多遺跡 第18次調査」『田原本町文化財調査年報8 1998年度』
- 2) 清水琢哉・奥谷知日朗2009「寺内町遺跡 第10次調査」『田原本町文化財調査年報17 2007年度』
- 3) 清水琢哉・奥谷知日朗2009「法貴寺遺跡 第6次調査」『田原本町文化財調査年報17 2007年度』
- 4) 清水琢哉・河森一浩・奥谷知日朗・豆谷和之2009「法貴寺蓮光寺の総合的調査」『田原本町文化財調査年報17 2007年度』
- 6) 河森一浩・藤田三郎2008『瓦に込めた願い－田原本の瓦づくりと民間信仰－』唐古・鍵考古学ミュージアム平成20年度
春季企画展
- 7) 小林章男1985「生きている鬼瓦」『屋根叢書4』
- 8) 小林章男1991『続 鬼瓦』共同精版印刷株式会社
- 9) 小林章男1999「裏から覗いた鬼瓦」日本鬼師の会・山田脩二『鬼文化江戸東京物語展』
- 10) 小林章男2004『鬼瓦読本』日本鬼師の会
- 11) 医王寺（田原本町宮森）には、「南都細工人米義作 新町瓦屋平四郎」銘をもつ棟端飾瓦がみられる。
- 12) 奈良文化財同好会 狼犬の会1987『狼犬の研究 奈良市周辺の狼犬』
- 13) 石橋源一郎「謎の唐人を追って－田原本中郷土研究部の活動記録」『歴史地理教育』532号 1995
- 14) 12) に同じ。

〈参考文献〉

田原本町史編さん委員会1986『田原本町史 本文編』

■ 棟端飾瓦観察表 凡例■

1. 本表は、本文で紹介した棟端飾瓦の観察表である。
2. 「法量」は「長」・「幅」・「厚①」・「厚②」についてはcmを、「重量」についてはkgを単位とする。
3. 「法量」の計測箇所はで下図のとおりである。このうち鬼面瓦については、貼り付けた鬼面顔部が母屋台部をはみ出す例もあるが、母屋台部の最大長を「長」・「幅」とする。また「厚①」は、鬼面瓦における角・額・鼻での最大厚をさし、その部位を表記する。なお、隅蓋瓦については、獅子・鬼の最大高を「長」、最大幅を「幅」とする。
4. 「孔」は、「母屋台部」や「補立」、「側張」における孔の有無を示し、三日月形の穿孔については縦・横の長さを、円形孔については直径を示す。単位はcmである。



第4表 棟端飾瓦 觀察表

瓦番号	図版	所在	設置位置	形態			表面		鬼面	裏面			色調	備考	
				鰐	鰐足元	上辺肩 切込	落張	文様等	阿吽	側張	補立	把手	焼成		
鬼面瓦1	第4図	多神社	拝殿		×	×	×		阿	b類	×	a類	黒灰 良好	合子型	
鬼面瓦2	第5図			×	×	×	×		阿	b類	×	a類	黒灰 良好	合子型	
鬼面瓦3	第6図			×	×	×	×	連珠貼付	阿	c類	×字形	a類	暗灰 良好		
鬼面瓦4	第7図			×	×	○	×		吽?	c類	縦位	c類	黒灰 良好		
鬼面瓦5	第8図上	多觀音堂	本堂	×	×	×	×	連珠竹管	阿	b類	×	a類	黒灰 良好	合子型	
鬼面瓦6	第8図中		本堂	×	×	×	×	連珠竹管	吽?	b類	×	a類	淡黄灰 やや甘	合子型	
鬼面瓦7	第8図下		本堂	×	×	×	×	連珠竹管	吽?	b類	×	a類	淡黄灰 やや甘	合子型	
鬼面瓦8	第9図上 第10図上	安樂寺	本堂	○	×	○	×	連珠貼付	吽?	c類	×	a類	暗~淡灰 良好	下半に合子型	
鬼面瓦9	第9図下 第10図下		本堂	×	×	○	×	連珠貼付	阿	c類	×	a類	黒~暗灰 良好		
鬼面瓦10	第11図	津島神社	拝殿	×	×	○	×		吽?	b類	×	a類	黒灰 良好	隅降棟瓦	
鬼面瓦11	第12図上			×	×	○	×		吽?	b類	×	a類	暗黄灰 良好	降棟瓦 合子型	
鬼面瓦12	第12図下		社務所	○	○	○	×	獅子	阿?	c類	×	b類	黄灰 良好	隅降棟瓦	
祈願・呪文 紋瓦1	第13図上		拝殿	○	○	○	○	橘	-	c類	縦位	c類	暗灰 良好	棟飾瓦	
祈願・呪文 紋瓦2	第13図中			○	×	○	○	巴紋	-	c類	×	b類	黒灰 良好	隅降棟瓦	
祈願・呪文 紋瓦3	第13図下			×	×	○	○	三鱗紋	-	c類	縦位	c類	暗灰 良好		
祈願・呪文 紋瓦4	第14図上		社務所	○	×	×	○	五瓜に唐 花	-	c類	×	b類	暗灰 良好	妻飾瓦	
祈願・呪文 紋瓦5	第14図下			○	×	○	×	五瓜に唐 花	-	c類	×	b類	暗灰 良好	隅降棟瓦	
祈願・呪文 紋瓦6	第15図上			○	×	○	○	五瓜に唐 花	-	c類	×	b類	黒灰 良好	降棟瓦	
祈願・呪文 紋瓦7	第15図下			○	×	○	○	五瓜に唐 花	-	c類	×	b類	暗灰 良好	降棟瓦	
祈願・呪文 紋瓦8	第16図上			○	×	○	○	五瓜に唐 花	-	c類	×	b類	黒灰 良好	隅降棟瓦	
祈願・呪文 紋瓦9	第16図下			○	×	○	○	梵字	-	c類	×	b類	黒灰 良好	隅降棟瓦	
祈願・呪文 紋瓦10	第17図上		染田寺	釣鐘門	○	×	○	×	袴袴	-	c類	×	b類	暗灰 良好	
隅蓋瓦1	第17図下			釣鐘門	-	-	-	-	獅子	-	-	-	-	黒灰 良好	
鬼面瓦13	第18図上	鏡作神社	旧堂	○	×	○	×	連珠貼付	阿	c類	十字形	c類	暗灰 良好	当て具痕	
隅蓋瓦2	第18図下		旧堂	-	-	-	-	前鬼	-	-	-	-	暗灰 やや甘		
鬼面瓦14	第19図	善照寺	本堂	○	打割?	○	×	連珠竹管	阿	c類	×	a類	暗灰 良好	合子型	
鬼面瓦15	第20図上		本堂	×	×	×	×		阿	c類	×	b類	暗灰 良好		
鬼面瓦16	第20図下		本堂	×	×	×	×		吽?	c類	×	b類	暗灰 良好		
鬼面瓦17	第21図下		本堂	○	×	×	○		阿	c類	×	b類	暗~淡灰 良好		
鬼面瓦18	第22図上		佛光寺	庫裏	○	○	○	○		吽?	c類	×	a類	暗灰 良好	
鬼面瓦19	第22下 第23図		庫裏	○	×	○	×		吽?	c類	扇状 5本	a類	黒灰 良好	右肩にヒビ補修	
鬼面瓦20	第24図	教安寺	本堂	×	×	×	×		阿?	c類	×	b類	暗灰 良好		
隅蓋瓦3	第25図		本堂	-	-	-	-	獅子	吽?	-	-	-	暗灰 良好		
鬼面瓦21	第26図上	淨福寺		○	打割?	○	○		吽?	b類	×	a類	暗~淡灰 やや甘	合子型	
鬼面瓦22	第26図中	光源寺		×	×	×	×		吽?	c類	×	b類	黒灰 良好	当て具痕	
鬼面瓦23	第26図下	大念寺		×	×	×	×		吽?	c類	×	a類	黒灰 良好		
祈願・呪文 紋瓦11	第27図上	中谷家	納屋	○	○	○	×	菊花	-	c類	×	b類	黒灰 良好		
祈願・呪文 紋瓦12	第27図下		納屋	○	○	○	×	牡丹	-	c類	×	b類	黒灰 良好		
平瓦	第28図	興福寺	南円堂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	暗灰 良好		

